

社交期としての冬 - 冬季娯楽行事にみるユッピック/チュピック社会生活の変化と持続 -

著者	久保田 亮
雑誌名	東北人類学論壇
号	5
ページ	1-17
発行年	2006-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/56268

社交期としての冬 ー冬季娯楽行事にみるユッピック／チュピック社会生活の変化と持続ー

久保田 亮

1. はじめに

本稿はユッピック／チュピック村落における社交的な活動として冬の娯楽行事の性質を分析することを通して、アメリカ社会の周縁に生きる先住民の社会生活の変化と持続について検討する。

アラスカ州南西部に暮らす先住民、ユッピック／チュピック (Yup'iks/Cup'iks) の伝統的¹社会生活は夏と冬では大きく異なっていた (モース 1981[1906])。夏季における基礎的な社会単位は双方向的大家族であったが、冬季は複数の夏の基礎的な社会単位が冬季居住地に集住した (Fienup-Riordan 1986:31)。冬季居住地における居住形態も家族が共住する夏季の形態とは異なっていた。すべての成人男性がカジキ² (*Qasgiq*) で共住する一方で、女性や子供たちなどのその他の家族はエナ (*Ena*) と呼ばれる住居にそれぞれ分かれて暮らすのが、冬の居住形態であった (Fienup-Riordan 1986:31)。成人男性が寝食を共にしたカジキは、儀礼の実施場所、社交場などの役割をも果たしており、冬季居住地における儀礼的、社会的中心であった (Fienup-Riordan 1994:34)。そして、カジキの周囲を取り囲むように複数のエナが立ち並んでいた (Fienup-Riordan 1986:31)。

伝統期におけるユッピック／チュピック社会の季節的変異は、彼らの伝統的生業である狩猟・漁労・採集活動のリズムと深く関係していた (モース 1981[1906]:82)。そして、その変化が宗教生活などの社会生活の諸側面にも作用し、それら諸側面も季節の変化に同調して変異することをモースは指摘した (モース 1981[1906])。夏季は狩猟・漁労・採集活動が活発化し、同時に社会単位の枠組みを越えた社交的な活動が沈滞化する季節であった。アラスカ南西部では夏の訪れとともに、解氷した海面からアザラシが顔を出し、各種渡り鳥が産卵のため南から飛来し、シャケが河川を遡上し、やがて内陸部のツンドラ一面に野いちごが実を結んだ (Fienup-Riordan 1994:14-25)。こうした時期毎に変化する利用可能な自然資源の収穫のため、彼らは個別の大家族単位で沿岸部、河岸、内陸部へと移動しながら暮らした。他方、冬は狩猟・漁労・採集活動が停滞する季節あり、それによって社交的な活動が活性化される季節であった。冬の気温は-30度まで低下し、河川や沿岸海域は凍結した (Fienup-Riordan 1994:28)。こうした自然環境要因は生業活動の実施を困難なもの

¹ 本稿では、ユッピック／チュピックの定住化以前を指して伝統期と記述する。本稿で筆者が取り上げる地域において、それは1950年以前を示す。また、「伝統的」とした場合でも定住化以前の状況を言及したものとする。

² チュピック語ではカイギ (*Qaygiq*) と呼ぶ。定住後、成人男性は家族と同居するようになったが、定住以降もカイギはしばらく存在し、男性村人たちの社交場、作業場などとして利用された (Fienup-Riordan 1994)。

としたため、彼らは冬季居住地に集結して夏季に捕獲した食料を消費して暮らし、主に屋内での活動を行った (Fienup-Riordan 1994:28)。

冬の営みの代表的なものが、ユッピック／チュピックが集団的に実施した各種伝統儀礼であった。儀礼は、冬季居住地の社会的中心であったカジキで執り行われた。

アラスカ州南西部に暮らす「エスキモー」社会には、カナダやグリーンランドに暮らす「イヌイット」社会に比べて、より精巧な伝統儀礼のサイクルが存在した (Lantis 1947, Morrow 1984, Fienup-Riordan 1994)。冬季居住地における伝統儀礼サイクルは冬至の時期に開催されるナカウチック (膀胱祭) に始まり、ケブギック (使者祭) が続き、ケレック (招待祭) の開催により締めくくられた (Morrow 1984)。

冬の儀礼は、人間と超自然的存在との友好関係や村落内・村落間の社会関係を維持、強化する機会であった。例えば、前述のナカウチック儀礼においては、アザラシの魂が宿るとされる膀胱を人間世界へやってきたゲストとしてもてなした後に水中に沈め、その魂が再び肉体を得て再生することを祈念した (Morrow 1984:118-127)。一方、ケレック儀礼においては、仮面ダンスを披露して動物の魂を惹きつけ、来るべき夏の狩猟・漁労活動の成功を願った (Fienup-Riordan 1994)。また、ケブギック儀礼では近隣冬季居住地の住民を招待し、ダンスを披露したり、贈答品を与えて歓待した (Morrow 1984:131)。このように、ユッピック／チュピック社会における冬は、「観念上の集団が再構成される機会」(モース 1981[1906]:88) として位置づけることが出来た。

しかし、20 世紀初頭に本格化する西洋社会との接触は、伝統ユッピック／チュピック社会生活の季節的変異に影響を与えた。まず、キリスト教宣教師をはじめとする西洋社会からのエージェントが伝統儀礼やダンスの実施に干渉³した (Fienup-Riordan 1991, 久保田 2005)。その結果、伝統儀礼は断絶し、ダンスは伝統儀礼の文脈で踊られることはなくなった。他方、伝統的宗教実践の崩壊とともに、ユッピック／チュピックのキリスト教教義、実践の受容が進んだ。また、新設の定住村への移住により、「集合の冬」という伝統ユッピック／チュピック社会の特質は相対的に弱められた。並びに、ユッピック／チュピック子弟を対象とした公的学校教育の実施や商品に対する依存度の増加による村落経済の複合経済化が本格化し、季節的に変化する狩猟・漁労パターンに並んで、登校・下校時間、就業時間、休日、祝日といったアメリカ主流社会由来の制度が村落生活のリズムを律する大きな力となっていった。

村落生活のリズムを左右するこの二つの力は、二つのカレンダーの違いとして具体化する。つまり、「12 月」が「太鼓を叩き鳴らすとき」(Jacobson 1984:670) もしくは「あちこち周辺に出かけるとき」(Jacobson 1984:670) である「エスキモーのカレンダー」と、「12 月」を祝祭、休暇のシーズンとして位置づける「主流社会のカレンダー」という、二つのカレンダーである。

本稿が着目するのは、この二つのカレンダーと現代ユッピック／チュピック村落社会生活との関

³キリスト教宣教師は、アガシコック (*Angalkuk*) というユッピック／チュピック社会の宗教職能者が介在する伝統儀礼を「悪魔的行為」としてとりわけ激しく糾弾した (Ménager 1962)。

係である。キリスト教徒化、定住化、経済システムの変化、アメリカ的教育の適用といった歴史的経験を経て、現在の「エスキモーの冬」はいかなる様相を呈しているのであろうか。

そこで本稿はこの問題意識に基づき、アメリカ主流社会由来の制度としての「クリスマス休暇」という枠組みの中で、「エスキモーの冬」がどのように変化し、かつなにか持続しているのかを民族誌的データの分析に基づいて検討する。具体的には、「クリスマス・ダンス」と「バスケットボール大会」というクリスマス休暇期間中に開催された二つの娯楽行事を取り上げ、それぞれの歴史を踏まえた上で二つの活動の性質を分析・対比し、主流社会からの影響に対して先住民社会がいかに応答しているのかという観点から述べたい。

本稿が利用する民族誌的資料は、2005年12月から2ヶ月間実施したチバック村での実態調査で収集したものである。

調査地であるチバック村は、アラスカ州南西部のベーリング海沿岸地域にある。近隣地域に暮らしていたチュピックが現在のチバック村に移住したのは1950年のことであった。1950年に、201名（44世帯）が、翌年に22名（4世帯）がチバック村に移住した（Flanders 1986:110）。その後、チバック村の人口は増加し続け、2005年では推定916名が暮らしている（State of Alaska 2006）。2000年の国勢調査によれば、総人口765名中、19歳以下の人口が総人口の55%（418名）を占めている。

チバック村は総人口の95.5%（692名）をアラスカ先住民が占めている（State of Alaska 2000）。彼らの自称はチュピック（*Cupik*）といい、アラスカ南西部のその他村落で暮らすアラスカ先住民の自称であるユピック（*Yupik*）とは異なる⁴。この違いはチバック村出身者が中央ユピック語の一方言「フーパーベイ・チバック方言」として言語学的に分類される「チュピック語」を話すことに由来している（Jacobson 1984）。

表1 チバック村人口推移。

年度	総人口	増加数
1950	234	—
1960	315	80
1970	387	72
1980	466	79
1990	598	132
2000	765	167
2005（推計）	916	151

State of Alaska(2006)より筆者作成。

2. クリスマス時期のヨガックと「クリスマス・ダンス」

本章が取り上げるダンスとは、ヨガック（*Yuraq*）、もしくはエスキモー・ダンス（Eskimo dance）という様式のダンスである。

宣教師との日常的な接触が始った1920年代以来、伝統儀礼の文脈におけるヨガックは勿論のこと、娯楽としてのヨガックもまた公的な場面から姿を消した。だが1944年にヨガックは再び公の

⁴ 言語学的な分類では、チバック村及び隣村のフーパーベイ村住民の言語は中央ユピック語の一方言「フーパーベイ・チバック方言」である（Jacobson 1984）。しかし、チバック住民の自称は、チュピック語を話す「チュピック」、フーパーベイ住民はユピック語を話す「ユピック」と両者には違いが認められる。

活動として復興した。本稿が対象とするチバック村では、当時の冬季居住地の一つであったカシューナックに教会が設立されたことを祝してチュピックがヨガックに興じたのだが、この出来事が「ヨガックの復興」として語られている。この復興に先立ち、チュピックは宣教師とある取り決めを交わしたという。それは、ヨガックから宗教的な要素を一切排除するというものであった (Pingayak 1998)。以来、ヨガックは「純粋な娯楽」として村落生活の公的な活動としての地位を得た。

1950年のチバック村への移住以降、チュピックはクリスマス時期及びイースター時期の二度、ヨガックを踊ったという。本章では、クリスマス時期のヨガックを歴史史料と住民の語りに基づき記述した上で、2005年の「クリスマス・ダンス」について記述し、社会的な活動としてのヨガックが歴史的にどう変化したのかを検討する。

2-1. クリスマス時期のヨガック

クリスマスの時期のヨガックは、チバック村に人々が住み始めた1950年に既に開催されていた (Flanders 1986: 111)。当時のクリスマス時期のヨガックでは、隣村のフーパーベイ村住民がチバック住民によって招待され、両村の住民がそれぞれヨガックを披露しあった (Flanders 1986: 111)。

チバック住民P氏によると、チバック村でのヨガックが終わると、今度はフーパーベイ住民がチバック住民を招待してフーパーベイ村でヨガックを開催するのが常であったという。1950年のヨガックにおいて、チバック住民がフーパーベイを訪問した記録は確認していないが、クリスマス時期にヨガックを通して二村が交流したことが、1960年代の学校新聞記事に記されている。例えば、1962年12月号には、12月26日と29日の夕刻に村公民館でヨガックが開催された、という記事がある。この記事は「多くのチバック村在住の老若男女がかなりの時間をエスキモー・ダンスの練習に費やし」たこと、及びドラマー2名、ダンサー11名をはじめとする多くのフーパーベイ住民が訪問したことを伝えている (Chevak Tundra 1962b)。また、1967年12月号には、フーパーベイ村のダンサーが12月31日に訪問してチバック村の4時間にわたるヨガックに参加したこと、及び今週末⁵にチバック住民がフーパーベイ村を訪問してヨガックをする予定であることを伝える記事がある (Chevak Tundra 1967)。

先の学校新聞の記事にもある通り、村人はクリスマス時期のヨガックに向けて練習を行った。チバック住民L氏によると、練習はカジキ⁶で行われたという。その際、村の古老が年齢に応じて村人をグループ分けし、どのグループがどのヨガックを踊るのかということを割り当てていた。こうして古老が割り当てた曲を、チバック住民L氏は「私たちの歌 (Our Song)」と呼んでいた。L氏によれば、各グループは「私たちの歌」だけを練習し、他のグループの歌を練習することは決してなかった。そして「私たちの歌」をドラマーが歌い始めた時だけ、観客の前でそれを踊った。それぞれ

⁵ 1967年12月31日は日曜日であるため、ここで言う「今週末」とは1月6日から1月7日にかけてであると考えられる。

⁶ チバック住民であるL氏はチュピック語を話すため、実際には「カイギ」と言及したが、本稿では混乱を避けるためあえて「カジキ」と記述した。

の歌が誰の歌かが予め決まっており、かつそれぞれが一曲だけ「我々の歌」を持っていたため、ヨガックを披露するダンサーは常に異なった顔ぶれであったというのである。

村人は観客がパフォーマンスをより楽しむことが出来るように工夫を凝らしていた。その一つが仮面の利用であったという。例えば、チバック住民 Q 氏によると、ある男性の製作した仮面は人間の顔を模した仮面であったが、その両目玉が動く仕掛けが施してあった。目玉には糸がとりつけてあり、その一端を肩に取り付けて踊ると、肩を揺らす度に目玉がギョロギョロと動いた。また、同じく人間の顔を模した別の仮面は、顎の部分が動くようになっており、首を振るたびに顎がガクガクと揺れたという。

こうした仕掛けを施した仮面の利用の他にも、仮面を二つ予め装着して、ダンスの最中に外側の仮面を脱ぎさるパフォーマンスや、カーリーヘアのカツラをつけて踊るパフォーマンスなど、いかにして観客を惹きつけるかということがヨガック・パフォーマンスの一つの焦点となっていたという。

チバックとフーパーベいの両村民はどちらがより多くの観客を惹きつけることが出来るかを通して競い合っていた。例えばチバック住民 Q 氏はフーパーベい住民とチバック住民とによるヨガックの際、フーパーベいの人々の演技に加わったことがあったが、それに憤慨したチバック住民 R 氏から批判されたという。当時のヨガック・パフォーマンスは、ダンスによる両村の競い合いであり、相手方のヨガックに参加する自分の行為は、自村のチームに対する反逆行為とみなされたのだ。

ヨガックを通した競い合いに関して、パフォーマンスがどれだけの観客を惹きつけたかを計る大きなバロメーターは「観客をどれだけ笑わせることが出来たか」であった。多くのチバック住民は「チバック住民のヨガックは、フーパーベいのそれよりも常に面白かったので、何時もヨガックの勝負に勝っていたのだ」と述べた。

また、その年に初めてハンティングに参加して獲物を得た少年、野いちごを摘んだ少女、または初潮を迎えた少女が踊る際には、アクータック (Akutaq)⁷や魚を振舞い、彼らが供給者となったことを祝福することもあった、と H 氏は語った。

このように、クリスマス時期のヨガックは、チバック村設立当初に始まり、以下に記述するように現在も実施されている。しかし、こうした過去のヨガックに関して、チバック住民はクリスマス時期にヨガックを踊ったとは語るものの、キリストの生誕日であるクリスマスだからという理由でヨガックを踊ったのではない、と述べていた。例えば、チバック住民 S 氏は、「クリスマスだからヨガックを踊ったのではなく、冬だからヨガックを踊ったのだ」と明言した。そして、今日のクリスマスにおけるダンスは、過去のダンスとは別ものである、とも言っていた。

⁷ アクータックは俗に「エスキモー・アイスクリーム」と呼ばれる料理であり、「混ぜ物」と訳すことが出来る (Jacobson 1984:54)。字義通り、サーモンベリーなどの野いちご類、砂糖、アザラシ脂、ゆでた魚の白身などを「混ぜて」作る。

2-2. クリスマス・ダンス

それでは、クリスマス時期のヨガックの現在とはいかなるものか。

現在のクリスマス時期のヨガックは、「クリスマス・ダンス」と村人に呼ばれている。クリスマス・ダンスでは、ヘッドスタートから高校生までチバック村学校の生徒全員がヨガックを披露することになっている。彼らが踊るのは、チバック村学校文化遺産プログラム責任者である G 氏創作のヨガックである。G 氏はどのヨガックをどの学年が踊るかを事前に割り振っており、生徒たちはそれに従って最低週 1 回は割り当てられたダンスを練習する授業に参加する。だが高校の授業科目でヨガックを履修している生徒はその限りではない。「ダンキック・シアター」と呼ばれるこの授業は週 4 回あり、その中で履修生は様々なヨガックを練習するだけでなく、ドラムの叩き方指導、歌唱指導、振り付け創作なども学んでいる。

クリスマス・ダンスはチバック住民のための行事である。例えば、後述するバスケットボール大会では、事前に大会開催告知を各村の小売店などに掲示し、村内並びに村外からの参加チームを募ったのだが、クリスマス・ダンスではそうしたことは行われない。また、「文化遺産週間」、「冬祭」、「ツンドラ祭」といったヨガック・パフォーマンスを伴う年中行事では他村を公的に招待するのが常であるのだが、クリスマス・ダンスではそうしたことも行われない。

2005 年のクリスマス・ダンスは 12 月 25 日⁸にチバック村公民館を会場として開催された。ダンス開始時刻は午後 7 時を予定していた。だが、観客、ダンサーのどちらもが会場になかなか姿を現さなかったため、実際にヨガックが始まったのは開始予定時刻よりも 1 時間遅い午後 8 時であった。

会場である公民館には二つの装飾が施されていた。一つは高さ 190 センチほどのクリスマス・ツリーである。ツリーは金色、銀色のモールなどで飾り付けられていた。もう一つは、アザラシ皮製のキャンバスに描かれた村人の先祖 4 名の人物画であった。この人物画は、1920 年代に撮影された写真を元に、チバック在住の教師が描いたものであった。

前述した通り、クリスマス・ダンスはチバック村学校に在籍する生徒たちがヨガックを披露する機会とされていたのだが、実際にはそれ以外の村人たちもパフォーマンスに参加していた。これはこの会で演じられた合計 21 回のダンス・パフォーマンスのすべてに認められた。これらの村人たちは、ヨガック・パフォーマンスが中盤にさしかかるとステージにあがり、生徒たちとともにヨガックを踊った。ダンスとともに披露されるドラムと歌は、50 代から 20 代の男性村人 7 名が担った。

パフォーマンスの途中からステージにあがるのは、そのヨガックを披露することになっている生徒たちの家族や近親者（母親、父親、祖母など）であった。例えば、A 氏と妻の B 氏の間には、学童年齢にある子が 6 人いる。クリスマス・ダンスでは、この 6 名がそれぞれの学年毎にダンスを披露したが、A 氏はそのうち長男、三男、四男のダンス・パフォーマンスの際にステージ上にあがって子供たちの背後でヨガックを踊った。また、妻の B 氏は長男、次男、三男、四男、及び三女、四女のダンス・パフォーマンスの際にステージ上にあがり、子供たちの後ろで共にヨガックを踊った。

⁸ 2001 年に実施した同村での予備調査の際も、ヨガックは 25 日午後 7 時 30 分から午前 0 時まで行われた。

また、N氏（女性）とその義理の母であるO氏は全パフォーマンス中、一度ステージ上でN氏の子が踊るそばでヨガックを踊った。

クリスマス・ダンスで踊った人の延べ数は、生徒及び途中から参加する村人たちを含めて339名であった。だが、前述した通り、生徒たちが踊ったのは一人一回ずつだったが、その他の村人たちは数回にわたりステージ上にあがりヨガックを披露したため、実際にダンサーとしてステージ上で踊った人の実数は、生徒162名、その他の村人40名の総計202名であった。また、男女別にみると、男性88名（うち生徒85名）、女性114名（うち生徒77名）であった。2005年度のチバック村学校の生徒数は330名であるため、クリスマス・ダンスには全生徒の約半数のみが参加したということが出来る。



写真1 親子によるダンス演技。

(2005年12月25日筆者撮影)

他方、クリスマス・ダンスに観客としてのみ参加した村人の正確な人数はわからない。約4時間半のクリスマス・ダンスの中で、途中から参加したり、終了前に帰宅したりした村人が多数いたためである。ちなみに、ダンス開始時に公民館に姿を現した村人は約130名ほどであったが、この中にはダンサーとして参加した村人も含まれている。

クリスマス・ダンスについて、チバック村学校文化遺産プログラム責任者であるG氏は「クリスマスを祝うためにヨガックを踊るのである」という見解を示した。また、チバック住民T氏は、個人的見解であると前置きしつつ「ヨガックを踊ることでキリストの誕生を祝う意味があるのではないか」と述べた。

2-3. クリスマスの時期のヨガックの通時比較

定住村であるチバック村への移住以来、村人はクリスマスの時期にヨガックを踊っていた。しかし、「クリスマス・ダンス」と過去に開催されたクリスマス時期のヨガックとのあいだには次の三点の相違がある。

第一点は参加者の違いである。過去のヨガックではチバック住民により招待された隣村住民の参加があった。しかしこうした他村住民の招待や参加はクリスマス・ダンスには認められない。この点から、過去のヨガックが村落外に広がる社交の機会を村人に提供していたのに対し、クリスマス・ダンスは村落内に限定された社交の機会となっている。また、この変化により、ダンスを通じた競い合いという性質は、クリスマス・ダンスには認められなくなっている。

第二点は参加者の属性の違いである。過去のヨガックでは村の古老がヨガックの準備や披露に一

定の役割を果たしており、「老若男女」がヨガックに参加したとされている。しかし今日のクリスマス・ダンスでは、公的学校教育の中で文化教育に携わる G 氏の先導の下、学校に在籍する生徒たちとその両親（特に母親）、祖母が主たる参加者となっていた。つまり、クリスマス・ダンスは村落内における社交の機会ではあるものの、実際の参加者は学校の生徒、及び彼らの近しい親族の中でもヨガックに関心を持つ村人に限定されている。

第三点はクリスマス時期のヨガックに対する意味づけの違いである。過去のヨガックは、1960年代の事例から推定すると、キリストが生誕したとされる12月25日に実施することを前提としていなかったと考えられる。また、村人の語りでは、過去に実施したクリスマス時期のヨガックは「冬」という季節に結びついており、キリスト教の祝祭である「クリスマス」とは無関係な活動であったとされている。一方、クリスマス・ダンスに関しては12月25日、すなわちキリストの誕生した日に踊ることこそ意味があるとする村人の語りがある。つまり、クリスマス時期のヨガックに対する意味づけは、伝統チュピック／ユピック社会における冬の活動としての位置づけから、キリスト教の祝祭としてのクリスマスに関連する活動としての位置づけへと移行していったと言うことができよう。

3. バスケットボール

バスケットボールは冬場にも楽しめる室内競技として19世紀の終わりにアメリカで誕生したスポーツである（ネイスミス 1983[1941]）。本章ではチバック住民によるバスケットボールの受容と村落生活への定着の歴史を概観した後、クリスマス休暇に開催された二つのバスケットボール大会について記述し、社会的な活動としてのその性質を検討する。

3-1. バスケットボールの受容と定着

バスケットボールはアラスカ州内において指折りの人気スポーツである。2005年度にアラスカ学校活動協会（Alaska School Activities Association）がアラスカ州内の高校生を対象として実施した調査では、バスケットボールはもっとも多く的高校生が参加する活動であった。また、男子高校生は好きなスポーツの第一位に、女子高校生はバレーボールに次ぐ第二位にバスケットボールをあげた（Alaska School Activities Association 2005:4-5）。

チバック住民がバスケットボールに触れるようになったのは1960年代のことであるが、その当時はそれほど人気のある活動ではなかった。例えば、1962年及び1965年発行の学校新聞「チバック・ツンドラ」の児童紹介記事において、5名の男子児童が趣味、もしくは好きなスポーツとしてバスケットボールを挙げている（Chevak Tundra 1962a, 1962b, 1963, 1964, 1965）。だが、その他大半の男子児童たちは「趣味」として狩猟、潮干狩り、釣りを、女子児童は裁縫、料理、読書をそれぞれ挙げている。また、村落生活の紹介記事の中にバスケットボール大会などの記述はない。

チバック住民の G 氏は、自分がバスケットボールを始めたのはセントメリーズの寄宿高校での学校生活を通じてのことである、と語った。彼がチバックを離れ、セントメリーズでの高校生活を始めたのは 1960 年後半のことである。当時のチバックには高校がなかったため、高校進学のためには G 氏のように村外の寄宿高校に通わざるを得なかった。つまり、こうした寄宿学校生活での経験を通じて、チバック住民は徐々にバスケットボールに親しむようになったのである。

チバック村における初めてのバスケットボール大会は 1976 年に開催された。この年はチバック村での高等学校教育が始まった年にあたる。チバック住民 H 氏は、当時を振り返って「ろくな試合ではなかった」と試合の様子を語った。

以降、バスケットボールは村人に人気のスポーツとなる。1983 年 10 月撮影のドキュメンタリーには、成人男性、成人女性の参加する試合の場面、そして生徒たちがユニフォームを着用し、学校体育館でシュート練習をする

場面が収録されている

(KYUK 1983)。生徒たちが課外活動でバスケットボールをする一方で、学校を卒業した村人たちは村バスケットボールリーグに参加することでバスケットボールを続けることが出来た。リーグ参加者は週に四度練習を行い、週末にはリーグ内、もしくは他村からのチームとの試合をした (McDiarmid 1983:66)。

こうして毎週開催された試

合は、選手は勿論、その観戦客にも、レクリエーションの機会を提供した (McDiarmid 1983:66)。

また、1985 年、1988 年には高校バスケットボール部が州大会へと進出するなど、チバック住民のバスケットボール技術は年々向上していった。

現在バスケットボールはチバック村、並びに近隣村落において冬の娯楽としての位置づけを確固たるものとしている。表 3-1 は調査期間中にチバック住民が参加した試合の一覧である。まず、高校、中学バスケットボール部に所属する学生はほぼ毎週チバック村もしくは他村での対外試合を行っていた。また、筆者が直接観察できなかった 1 大会⁹ (表には未記載) を加えると、12 月から

表 2 チバック及び近隣村落における試合一覧。

開催期間	大会名	開催村
12 月 16 日～17 日	フーバーベイ・クラシック	フーバーベイ
12 月 26 日～31 日	クリスマス・トーナメント	チバック
1 月 4 日	不明	フーバーベイ
1 月 6 日、7 日	対外試合 (高校)	チバック
1 月 7 日～10 日	トーナメント	ヌフタック
1 月 13 日、14 日	対外試合 (中学)	チバック
1 月 19 日～22 日	KCUK トーナメント	チバック
1 月 27 日	対外試合 (中学)	スキャモンベイ
1 月 28 日	対外試合 (高校)	ウラナクリート
2 月 3 日、4 日	対外試合 (高校)	フーバーベイ
	不明	トゥクソックベイ

筆者作成。

⁹ チバック村学校関係者の話によると、チバック村で 12 月上旬に「フープフェスタ」という大会が開催された。この大会は各村落の男子高校バスケットボール部、及び女子高校バスケットボール部が参加した大会であったが、参加村落、開催期間などその詳細は不明である。

2 月にかけて合計 3 つの大会がチバックで開催された。さらに、こうしたチバック村開催の試合に他村での大会開催を加えると、12 月下旬から 1 月下旬にかけて、ほぼ毎週チバック村及び近隣村落のどこかで大会が開かれていたことになる。

このように村でのバスケットボールは 1970 年代以降にはじまり、現在チバック村はもとより、近隣諸村落で数多くの大会が実施されるまでに至った。

3-2. フーパーベイ・クラシック

「フーパーベイ・クラシック」は毎年 12 月にチバック村の隣村であるフーパーベイ村で開催される高校女子バスケットボール大会である¹⁰。2005 年度大会は 12 月 16 日から 2 日間続いた。参加チームはフーパーベイ、チバック、スキヤモンベイ、そしてノームの 4 チームであった。大会形式はこの 4 チームによる総当たり戦であった。合計 6 試合の結果、3 戦無敗のチバックが 2005 年度の優勝チームとなった。

試合会場であるフーパーベイ村学校体育館には連日多くの観戦客が訪れた。体育館設置の階段状観覧席（約 200 名が座ることが出来る）は常に満席状態で、エンドライン、サイドライン沿いの床にまで多くの観客が座っていた。

試合観戦には入場料を支払う。成人が 2 ドル、子供が 1 ドルである。ただし、60 歳以上の高齢者と幼児は無料で入場である。入場料を受付に支払うと受付係員が観客の手の甲にマジックで印をつけた。この印を係員に見せると一度体育館を出ても、再入場できる。

大会期間中には会場で 3 種類のくじが販売された。観戦客は売り子を呼び止めてくじを購入した。それぞれの賞品はジンジャー・ブレッド製の家、ケーキ、そして現金¹¹であった。くじは 1 ドル単位で販売されているが、1 ドルあたりで購入できるくじの枚数は種類に応じて異なっていた。ジンジャー・ブレッドくじが 4 チケット、ケーキくじが 2 チケット、現金くじが 1 チケットであった。くじの抽選は大会表彰式終了後に実施され、その場で賞品が渡された。また大会記念 T シャツ、菓子や各種炭酸飲料が学校購買店で販売されていた。

観客の大半はフーパーベイ住人であったが、中にはチバック村をはじめとする近隣村落住民の姿も見受けられた。こうした観客の一群としてまず挙げられるのは、出場選手の両親と年長のキョウダイである。彼らは選手の送迎を兼ねて、応援のためフーパーベイ村を訪問していた。例えばチバック住民の A 氏は、妻の B 氏と彼らの子供たちをつれて試合会場に現れた。チバック村高校バスケットボール部に所属する彼らの娘が本大会に参加したためであった。同じくチバック住民 C 氏も、妻の D 氏、息子の E 氏とともに自分の娘が出場する試合の観戦のためフーパーベイ村を連日訪れた。またチバック村高校チームのポイントゲッターである F さんのため、チバック在住の彼女の姉 3 名がフーパーベイ村まで駆けつけていた。

¹⁰ フーパーベイ・クラシックの開始時期については不明である。

¹¹ 現金くじは「フィフティー・フィフティー」という名前と呼ばれる。くじの販売により集まった現金の半分を当選者、残りの半分を販売者が受け取る。そのため、当選金額は何枚のくじが売れたかにより変動する。

その他、選手の家族以外でチバックから来ていた人々としては、若者たち、とくにチバック村高校に在籍する男子高校生、とりわけ男子バスケットボール部のメンバーの姿が目立った。彼らはチバックのチームが出場する試合では大きな声を出し、手を叩き、足を踏み鳴らして応援していた。

応援において興味深いのは、チバック住民は決してフーパーベイのチームを応援しなかったことである。彼らは必ずフーパーベイの対戦相手を応援していた。同じようにフーパーベイ住民も決してチバックのチームを応援することは無かった。

決勝戦終了後には表彰式が行われた。優勝、準優勝、3位、スポーツマンシップ賞に輝いたチームにそれぞれトロフィーが贈呈された¹²。また、ベストプレイヤーが5人選出された。チバックからは2選手が選ばれ、メダルが与えられた。

選手、観客としての大会への参加は、親族関係、友人関係にある人々と交流する機会でもあった。チバック住民はフーパーベイ在住の親族、知人を多く持つこともあって、試合の空き時間を利用して彼らを訪問したり、彼らの家で食事をとったりした。例えば、前述のG氏は孫を連れてフーパーベイ村の古老二名（I氏、J氏）を訪問した。そのうちの一人I氏はG氏の娘婿の父で、孫からみれば父方祖父にあたる。G氏はI氏宅で食事をご馳走になり、お茶を飲みながら40分ほど歓談した後、I氏宅を去った。G氏はI氏宅を離れる前に、I氏に「クリスマスプレゼント」と言って、小切手を手渡していた。次にG氏はJ氏の自宅を訪問した。G氏とJ氏との間の系譜関係の有無は不明である。ただ、J氏とG氏はともに敬虔なキリスト教徒であり、またエスキモー・ダンスなどで顔を合わせる機会が多い。G氏はここでも食事をご馳走になり、食後にお茶を飲みながら歓談した。G氏がJ氏宅を離れる際、元助祭であるJ氏はG氏の頭に手を置いて祈り、G氏に祝福を与えた。

3-3. クリスマス・トーナメント

「クリスマス・トーナメント」は1977年からチバック村で開催されているバスケットボール大会である。2005年度大会は12月27日から5日間、チバック村学校体育館（収容人数およそ400人）を会場に開催された。先に記述した「フーパーベイ・クラシック」とは異なり、この大会は35歳以下の男性により構成されたチームが出場資格を持つ大会である。2005年度の参加チームは、地



写真2 地元チームへ声援を送る観客。

(2005年12月17日筆者撮影)

¹² 高校生が参加するバスケットボール大会の場合、上記の賞以外に所属選手のGPA平均がもっとも高いチームに「アカデミック・アワード」が送られる。

元チバック村から 5 チーム、フーパーベイ村から 5 チーム、ヌフタック村から 2 チーム、スキヤモンベイ村から 2 チーム、そしてセントメリーズ村から 1 チームの合計 15 チームであった。大会形式は、ダブル・トーナメント方式が採用されていた。2005 年度の決勝戦はフーパーベイのチームとヌフタックのチームが対戦し、結果フーパーベイのチームが優勝した。

「フーパーベイ・クラシック」と同様、「クリスマス・トーナメント」においても、観客は入場料を支払った。入場料は成人 3 ドル、子供 4 ドル、選手 5 ドルであった。但し、60 歳以上の高齢者は無料で入場できた。成人よりも子供の入場料が高く設定されている理由は、子供たちが試合中のコートの中に入り込むなどして試合を妨害することを防ぐためである。



写真 3 トーナメント決勝戦の様子。

(2005 年 12 月 31 日筆者撮影)

こうした料金設定は数年前にフーパーベイ村でのバスケットボール大会で始められ、チバック開催の大会でも導入したものだ、と関係者は語った。

先のバスケットボール大会と同様、学校購買店では炭酸飲料、ホットドックなどの軽食を販売していた。ただ、観覧席での飲食は禁止されており、飲食は体育館に併設したカフェテリアに限られていた。カフェテリアには大きなスクリーンがあり、そこには試合の様子がリアルタイムに映し出されていた。

またくじの販売も行われていた。賞品はアーミーナイフ、テレビゲーム (XBOX)、プラスチック製バケツ、コーヒーマーカー、掃除機、自転車、ガソリン、灯油、テレビ、冷蔵庫、そしてソリであった。くじは学校購買店において 1 チケット 1 ドルで販売していた。抽選は、最終日の表彰式後に行われた。

クリスマス・トーナメントの主催はチバック村学校であった。大会運営はチバック村学校教師 2 名の指導の下で、高校バスケットボール部部員たちがトーナメント表の作成などの事前準備から、大会期間中の会場設営、会場管理、入場受付、飲食物販売、くじ当選者の発表などのすべてを担当した。

クリスマス・トーナメントで得た収益はチバック村学校高校生たちのスポーツ活動費にあてる、と学校関係者は語った。チバック村学校はバスケットボールをはじめとするスポーツ活動の機会を生徒たちに提供しており、生徒たちは対外試合のために他村落を訪問することがしばしばある。だが、村落間の主な移動手段が飛行機であるアラスカ南西部では、対外試合をするたびに飛行機をチャーターしなければならない。つまり、クリスマス・トーナメントで得た収益をスポーツ活動費として充当することで、生徒たちはより多くの活動機会を得ることが出来るのである。

大会にはチバック住民は勿論のこと、フーパーベイ村、ヌフタック村、スキヤモンベイ村などからも観客が訪れた。とりわけ、フーパーベイのチームが決勝に進んだこともあり、決勝戦の会場はフーパーベイのチームを応援する歓声に包まれ、さながらフーパーベイ村で開催されている大会であるかのような状態だった。一方、決勝戦を観戦するチバック住民はフーパーベイの対戦相手であるヌフタックのチームに声援を送っていた。

大会最終日にはトーナメント戦とは別に、50歳以上のチバック住民とフーパーベイ住民によるエキシビジョン・マッチが行われた。フーパーベイ村の代表選手に関する詳細は不明であるが、チバック村代表は、50歳後半から60歳までの往年の名プレーヤーたちで構成されていた。彼らの中には村のバスケットボールリーグの現役メンバーも含まれている。観客たちは惜しめない拍手と歓声で、彼らのプレーを後押しした。この対戦ではフーパーベイ代表が勝利した。

決勝戦終了後、入賞チームとベストプレイヤーの表彰があり、それぞれトロフィーを授与された。

「フーパーベイ・クラシック」の場合と同様、大会期間中には村外からの観戦客がチバック住民たちを訪問していた。例えばH氏宅には隣村のフーパーベイ村に暮らしている彼の母親K氏が滞在していた。H氏一家とクリスマス休暇を過ごすためにチバック村に滞在していたK氏は、H氏の妻のL氏とともに試合を見に行ったり、H氏宅の隣に暮らすM氏を訪問したりなどしてチバック滞在を楽しんでいた。ちなみに、M氏はH氏の妻であるL氏の祖母の姉妹という関係にある。また大会期間中フーパーベイ村の若者2名がH氏宅を訪問した。H氏はこの若者たちに食事や飲み物を出そうとしたが、彼らは次の試合が始まってしまうからと言いつつ残して、そのまま去っていった。

3-4. バスケットボール大会の性質

上述した二つの事例に基づき、ユッピック／チュピック村落におけるバスケットボール大会が社交的な活動としていかなる性質を持っているのかを列挙する。

まず、大会への参加者に目を向けると、大会を開催する村落の住民以外の住民が数多く参加している点を指摘できる。例えば、クリスマス・トーナメントでは参加した15チーム中、10チームがチバック村外から参加したチームであった。また、観客として試合を観戦に来たチバック村外の住民の存在も忘れることは出来ない。開催村以外の人々が選手として、もしくは観客として参加するという点はフーパーベイ・クラシックにおいても同様に確認できる。このように大会は村の枠組みを越えた社交の機会を提供するのである。

しかも、こうした社交は大会会場の外部でも行われている。上述の二大会では、近隣の村外から大会にやってきた人々が、ついでにチバック村に住む親族や知人宅を訪問するという光景がいたるところで繰り返されていた。例えば、フーパーベイ・クラシックの折にG氏が訪ねたI氏とJ氏の場合、彼ら自身は大会会場には足を運んでおらず、その意味で大会に参加していたとは言えない。にもかかわらず、大会は非参加者である両者にも他村に暮らすG氏との交流の機会を提供した

のだと言える。つまり、大会は、大会会場のみならず、それが開催される村落の社会生活全体に影響を及ぼしているのである。

次に、大会は村落住民間のアイデンティティの違いが表出する機会である点を指摘出来る。観客は自分の村のチームに絶えず声援を送り、自分の村のチームに対する不利な判定には大声を上げて抗議する。大会はこのような行動を通して、それぞれの観客がどちらの村の出身であるかということが可視化される場なのである。また、対戦では異なったアイデンティティを持った観客同士のライバル意識を見ることが出来る。選手はバスケットボールというスポーツで競い合い、一方観客は応援を通して互いに競い合っているのである。

また、大会は単なる娯楽行事という側面だけでなく興行としての側面を持っている点も指摘できる。じじつ、クリスマス・トーナメントの記述において言及したように、バスケットボール大会の開催は主催者側の資金集めの手段となっているのである¹³。

4. 冬の娯楽行事にみる村落社会生活の変化と持続

クリスマス休暇というアメリカ主流社会の枠組みの中に組み込まれるという歴史的過程を経るなかで、ユッピック／・チュピックの冬の娯楽の性格には変化が生じた。社交的な活動としての冬の娯楽という観点から現行の「クリスマス・ダンス」を過去のヨガックと対照することで明らかになったのは、村落間の住民同士の社会関係の維持に果たしてきたヨガックの機能が縮小したことである。また、現行の「クリスマス・ダンス」におけるダンサーの構成は主に、学校と言う組織、そして同一世帯に暮らす親子関係（母子関係）を基調としており、村落内住民間の社会関係維持に果たしてきたヨガックの役割にも陰りがみえる。現行の「クリスマス・ダンス」がキリスト教の祝祭としてのクリスマスとの関係性を強め、その結果「エスキモーの冬」とヨガックの関係性が相対的に弱まった点も指摘できる。さらに、1970年代以降から新たな冬の娯楽としてのバスケットボール大会の定着とその後の発展は、アメリカ主流社会における冬季活動がユッピック／チュピック村落社会に浸透し、人気を得たことを示唆する。

クリスマス・ダンスをめぐる今日の状況は、冬季における社交的な活動に対する主流社会の影響力の強さを物語っている。キリスト教の祝祭であるクリスマスのある12月、冬の屋内活動として主流社会で誕生したスポーツであるバスケットボールを楽しむ12月といった、主流社会のカレンダーが織り成すリズムはユッピック／チュピックの冬の社会生活に大きな影をおとしている。

このような様式の変化にもかかわらず、「エスキモーのカレンダー」に記された「社交期としての冬」という伝統時代からの季節の位置づけが現在のチバックにおいても冬の村落社会生活を律しているということは注目に値する。主流社会の冬季の娯楽活動であるバスケットボールを受容したユ

¹³ クリスマス休暇以後にチバックで開催されたKYCKトーナメントはチバック村ラジオ局が主催した資金集めを目的としたバスケットボール・トーナメントであった。また、1月上旬（表2参照）にヌフタックで開催されたトーナメントもまた、高騰する燃料費をまかなうためにヌフタック村伝統評議会が主催した大会であった。

ッピック／チュピックは、それを取り込んで、村落の枠組みを越えた「社交期としての冬」を実践しているのだ。かつてのヨガック・パフォーマンスにおいて認知された村落同士の競合もまた、バスケットボールの対戦として形式を変えて続いている。そして、バスケットボールはヨガックと同様、村人に娯楽の機会を提供している。バスケットボール大会は興行であり、参加者は現金を支払って娯楽を買うのであり、その意味で村落外からの参加者を「ゲスト」として返礼を期待することなくもてなし贈答品を与えた伝統儀礼とは対照的である。しかしながら、本論でも指摘したとおり、バスケットボール大会の影響力は、会場内にとどまらず、村落の社会生活全体に及んでいるのである。

つまり、社交的な活動の観点からみたユッピック／チュピックにとっての12月は、「あちこち周辺にでかけるとき」としての意味づけを失っていない。バスケットボールを投げ所にユッピック／チュピックは互いの村を訪問しあいながら、村外に広がる社会関係を維持、強化している。村落住民間の社交場はカジキから学校体育館へとその中心を移し、住民同士はヨガックのエンターテインメント性からバスケットボールの技術によってしのぎを削るようになった。しかしながら、冬はモースが100年以上も前に指摘した「観念上の集団が再構成される機会」であり続けている。すなわち、冬は依然として「エスキモーのカレンダー」に記されている通り「社交期としての冬」なのである。

付記

本論文が依拠する研究は、東北大学21世紀COEプログラム・社会階層と不平等研究教育拠点からの支援により実現したものである。

5. 文献

Alaska School Activities Association

2005 “ASAA Winter 2005 Newsletter 48(27).

Chevak Tundra

1962a Chevak Tundra (School Newspaper) September, Chevak Day School.

1962b Chevak Tundra (School Newspaper) December, Chevak Day School.

1963 Chevak Tundra (School Newspaper) May, Chevak Day School.

1964 Chevak Tundra (School Newspaper) December, Chevak Day School.

1965 Chevak Tundra (School Newspaper) February, Chevak Day School.

1967 Chevak Tundra (School Newspaper), Chevak Day School.

Fienup-Riordan, Ann

1986 *When Our Bad Season Comes: A Cultural Account of Subsistence Harvesting and*

- Harvest Disruption on the Yukon Delta*, Alaska Anthropological Association Monograph Series #1, Anchorage, Alaska Anthropological Association.
- 1991 *The Real People and the Children of Thunder-The Yup'ik Eskimo Encounter with Moravian Missionaries John and Edith Kilbuk*, Norman and London, University of Oklahoma Press.
- 1994 *Boundaries and Passages: Rule and Ritual in Yup'ik Eskimo Oral Tradition*, Norman and London: University of Oklahoma Press.
- Flander, Nicholas Edward
- 1986 *Passage: Socioeconomic Change and Cultural Continuity in an Alaskan Community*, Ph.D Dissertation, Columbia University.
- Jacobson, Steve A.
- 1984 *Yup'ik Eskimo Dictionary*, Fairbanks: Alaska Native Language Center, University of Alaska Fairbanks
- 久保田亮
- 2005 「儀礼とダンスの断絶—宣教師の活動をめぐるアラスカ先住民ユピックの歴史認識」『東北人類学論壇』4:1-20。
- Lantis, Margaret
- 1947 *Alaskan Eskimo Ceremonialism*, Seattle and London: University of Washington Press.
- モーリス、マルセル (Mauss, Marcel)
- 1981 『エスキモー社会—その季節的変異に関する社会形態学的研究』宮本卓也訳、東京：未来社 (Eassai sure les variations asisonnières, des sociétés Eskmos: Étude de morphologie sociale', 1906)。
- McDiarmid, G Williamson
- 1983 Community and Competence: A Study of An Indigenous Primary Prevention Organization in an Alaskan Village, *White Cloud Journal* 3(1): 53-74.
- Ménager, Francis M.
- 1962 *The Kingdom of the Seal*, Chicago: Loyola University Press.
- Morrow, Phyllis
- 1984 It is Time for Drumming: A Summary of Recent Research on Yup'ik Ceremonialism, *Etudes/Inuit/Studies* 8:113-140.
- Pingayak, John F.
- 1998 *Cup'ik Studies: History and Culture*, Unpublished Manuscript, Chevak, Kashunamit School District.
- State of Alaska (Alaska Division of Community Advocacy)

2000 *Community Database Online*, http://www.dced.state.ak.us/dca/commdb/CF_COMDB.htm

KYUK TV Production

1983 *People of Kashunuk*, Bethel: KYUK Video Productions.

ネイスミス、ジェームス (Naismith, James)

1983(1980) 『バスケットボール その起源と発展』水谷豊訳、東京:YMCA 同盟出版部 (Basketball It's origin and development, Association Press, 1941)。